『黄檗文華』第百二十六号（二〇〇五―二〇〇六）
黄檗山万福寺文華殿　平成十九年七月三十一日発行
抜刷

あがたさん

田鍬到一

あがたさん

田鍬到一

県の森は「あがたさん」と呼ばれ親しまれてきた千数百年の歴史を有する古社です。

「あがた」は皇室の直轄地であり、特に近畿地方に多く散在していた古代氏族制度の行政単位の一つでありました。宇治川両岸に広がる地域を宇県・宇治県と称した時代に、その「あがた」の地主神として県神社は奉祀されたものと考えられます。その後大化改新の国郡制度により川を挟んで宇治郡と久世郡に分かれて郡界が定まり県の制度はなくなります。

「あがたさん」の御祭神は木乃花開耶姫命であります。御祭神については県神社先々代宮司奥村恒哉氏に「あたぬし考」の論文があり、梁塵秘抄（巻二）に出てくる神歌―宇治には神おわす　中おば菩薩御前　橘小島のあたぬし　七宝蓮華はをしつるぎ―を注釈し、菩薩御前とあたぬしは県神社と木之花開耶姫命であることを論証していて、平安末期迄遡ることが出来ます。

境内正面鳥居を入ってすぐ左側の絵馬堂北にある井戸は県井と言い、平安時代以来の歌枕にしばしば詠まれています。

橘　公　平　女

都人きても折らなむ蛙なく
あがたの井戸の山吹の花
―後撰和歌集―

後鳥羽院御製

蛙なく県の井戸に春くれて
散りやしぬらむ山吹の花
―続後撰和歌集―

妙光寺内大臣家中納言

山吹の花もてはやす人もなし
県の井戸は都ならねば
―新葉和歌集―

この神聖なる井泉は、上古より今日まで連綿と良質な水が湧出ていて、今でも献茶祭など神社の行事には欠かせぬものであります。

江戸の中頃になりますと県神社は人気の神様として良縁・安産・子授け・下の病平癒など一事一願の信仰が盛んになり、毎月五日の月次祭は「あがたさん」と称して急激に参詣者が増えました。特に一月五日の初県祭と六月五日（旧暦五月五日）の県祭は、江戸から明治・大正そして昭和にかけて随分な賑わいで有名になりました。

初あがた祭には角力・曲馬・神楽・狂言・浄瑠璃などが出て初恵比須・初天神と同様に独特な風物詩となっておりました。

昔より北河内の村々に初あがたの月参講がありまして、嘗ては赤褌に鈴をつけて米俵を担ぎ初あがたに参詣したと聞いております。往時から見れば衰微は否ず昔の面影はありませんが、現在も年末には版木刷りの神礼を奉製持参して村々（村野・大峯・藤坂・舟橋・招提・三栗・小倉・渚・御殿山・松井）の在所を廻っております。

この初あがた祭には古くより子供神輿が出ていて、今も地元の子供達がこの伝統行事を引継いできております。正月の御神輿は珍しい上に獅子三基が宇治の町を門付して廻ります。

数年前よりこれに協力参加する形で自作自演のグループが生まれてきたのが「この笛ふくや会」であります。新しい時代の宇治の芸能として進化発展する可能性を感じさせます。

「あがたさん」の例大祭は県祭で知られていて、江戸時代の町人階層の勃興に伴う庶民の熱烈な「あがたさん」信仰は「暗夜の奇祭」として世上に有名となりました。

つい数十年前まで県通り新町通り本町通りの三角地帯では民家が解放され、あがた祭の各々の講の人等が一種の無礼講として歌い踊り一夜の開放感を楽しむ姿を見ることが出来ました。そしてサーカス小屋が掛かり、露店が立ち並び新茶の商いは「あがた相場」を形成する程の経済的側面も有していたと言われています。

四十年前に私自身が講社廻りをしていた時の記録を見ると—心信講では甲賀御鏡講、信楽御鏡講、枚方御鏡講、燈油県講、堺東講、三輪（三田）誠心講、藤丸（小野原）講、落雁講、浮御堂講など、そして助祭講としては奈良御鏡講、木津信心講、南信心講、橋波信心講などがあります。又た二～三年前まで御神楽を運営する京都日供講も活躍されておりました。又た渡御に関わる講（奉賛会）には姫路御幣講、い組御幣講、本御幣講、玉造御幣講など、御影講、京橋、京橋東組、河内神楽講、萱島、守口講、野江講、県光講、貭津講、島飼講、菊一、見山、蹉陀講等々ありました。

ところがそれから二十～三十年前の間に、これらの講社は次々と解散していき、あっと言う間に二つ三つの講社を残す状態となってしまい見る影もない有様です。

ところが現在でも六百～七百の露店、夜店が軒を立ち並び、近在の若い人たちが「あがた祭」を楽しむ姿に変っても昔より県祭十万と言われた人出は健在です。

暗夜の祭礼として全国的に著名な県祭は、五日の大祭式夕御饌の儀の後、深夜に県神社本殿において燈火を消し神移しの秘儀を執行し出御となります。その神の依代となる神籬である梵天はロマンチックな分囲気の中で若象に担がれます。

数年前にこのロマンチックな渡御が神移し出御して御旅所着御のまま幣殿に留め置かれ還幸されないという事態が生じました。この暴挙を敢行するに及んだ担ぎ手の奉賛会はもはや信者として対応できない

関係となり、話合も不調に終わり渡御の奉仕を頼めなくなりました。これを機に已む無く　信仰上も社会的責任を全うするためにも四十年以上に亘る紛争に終止符を打って新しく出発する道を選択いたしました。

然るに予想もしなかった気運が生まれました。地元の若象のエネルギーが自然発生して一気に暴発「梵天講」が発足して見事に梵天渡御を成功させました。この様な地元のエネルギーが熱烈な信仰へと昇華して行くことがこの先の「あがた祭」の将来を決めることになると思います。

これに呼応して自然発生した「この笛ふくや会」が産声をあげたと思うとすくすく成長します。昨年の「あがた祭」には自作自演の演舞を披露して、手造り芸能が彩りを添えたことには全く感歎をいたしました。

朗々としたその口上は耳から離れません。

／あがた神社のかみさまは
／コノハナサクヤと申します
／たいそう綺麗で、情の深い
／燃えたつココロの神さんで
／とぎれとぎれの赤い糸
／つないで結んで、＝縁を取り持つ
／縁結び～ぃの神さんです
／今宵、水無月あがたの日
／コノハナサクヤの化身となって
／笛と太鼓と柏子木で
／祭に花を添えましょう
／ここにおいでの皆々様
／そで触れ合うもご縁の証
／拘子にのって身を揺らし
／調べに合わせて歌いましょ
／さぁさ、みんなで！ドン！さーくらぁ！

これらのことは県祭の成り立ちや構成内容を検討すれば頷けることで、隨分以前より時代の流れは参詣者はもとより受け入れ側にも変容せざるを得ない状況になってきていて、生活のリズムやライフワーク等の世相の変化は「あがた祭」の中身が激変せざる得ない事情をよく示唆しております。

「あがた祭」が古い歴史を有している文化遺産であると同時に現代の社会基準から大きく掛け離れてきていることも否めない事実で、それ故に新しい町おこしの祭礼へと変革発展していく監觴として行きたいと考えます。

十一月五日の月次祭は薮内家元の御献茶奉仕により献茶祭を斎行致します。その祭典では宇治の茶師より薮内宗家へ、宗家より県神社へと伝えられた茶壺口切の式法が厳粛に披露されます。茶壺に詰められた新茶はこの頃には茶味が熟成していて、茶室棠庵と綏邦書院に於て席が催されます。斯くして宇治茶の隆昌と茶文化の護持のために宇治茶業組合の協力を得てこの行事を続けて行きたいと念願しております。

六月八日大幣神事は県神社の祭礼とは全く別の独立した神事であります。明治維新の神仏分離令により、平等院総鎮守「県神社」は円満院門跡支配から離れるのですが、その折に大幣神事も「県神社」の方で預ることになり、大幣座が組織され今日迄護持されてきました。

社伝によりますと、藤原氏が宇治で政務を執った時に宇治郷の静謐を願い始めたとされております。多くの秘法を保持ながら町の角々を被う儀式を行い、疫病が土地に入らぬよう道饗祭を執行するのです。

県通り突き当りの大幣殿に於て儀式を斎行いたします。次に猿田彦を先頭にして大幣、騎馬神人と続く行列が県通りを北進します。宇治橋西詰で儀式の後宇治橋通りを進み一ノ坂に至り馬馳せの儀式を行い、再び大幣殿に帰ります。最後に大幣を引きずり宇治橋へ、その後ろを騎馬神人が追っかけます。大幣を宇治橋上より投げ入れて神事は終了いたします。

神事の供奉は、杓鉾にジャリ、カザシそれから下駄、七度半などがあり、特殊神饌として梅実、わかめがあります。

「あがたさん」は極めて古い時代から種々の文化遺産を保持してきました。しかし「あがたさん」の古き良き時代は遠くへ去りました。「あがたさん」は新しい時代へ果敢に挑戦していく道しか残されておりません。

（たくわ とういち・県神社宮司）

【著者略歴】 鳥取県出身、護王神社（京都）箱根神社（神奈川）、多田神社（兵庫）奉転

県神社　本殿